

論文

地蔵盆行事にみる地域の特徴と相関

——京都市北区と小浜市・舞鶴市の地蔵盆を事例として——

近 石 哲

CHIKAISHI Satoshi

はじめに

「地蔵盆」の主尊である「地蔵菩薩」は、仏教説話では、釈尊入滅後「弥勒仏」が出現するまでの間、六道の衆生を救済（教化）するために出現したと言われている。とくに死者が冥土に赴いて、地獄で閻魔の裁きを受け、ひどい苦しみに遭うことから救ってくれるのだと、固くまた深く信仰されていた。

この信仰は、やがて衆生（庶民）の間に流布するようになると、子安地蔵、身代わり地蔵、延命地蔵、とげ抜き地蔵と変化して、教団をもたない民間信仰として広く信仰を生むようになる。

しかし、それらの信仰も戦後の高度成長・都市における近代化による伝統的信仰行事の希薄化や、少子高齢化および無宗教層の増大等々の世相により、現在は危機をむかえていると言わざるをえない。

著しく変容を重ねる世相の中、町内会が中心で、尚且つ今も盛大に行われている地蔵盆に着目して、2010年と2011年に、京都市北区と、福井県小浜市西津地区、京都府舞鶴市で行われている地蔵盆行事を、現地での調査から得られた資料を中心にして、各地域の行事比較をすることによって、その形態を少しずつ変えながらも、今なお伝承され盛行している地域の民間信仰（地蔵盆）文化について考察し、その特徴らしきものに辿りつけばと考える。

また、各地域の地蔵盆行事を比較・考察することによって、その地域独特の「地蔵盆行事」が行われているのではないかという観点から、地域での地蔵盆行事の内容や伝承・継承の経緯を明らかにして、その特徴的な事柄が「地域独自の地蔵盆文化」と言えるのかどうかについて、調査し考察することを目的とするものである。

さらには、その文化を伝承・継承していく地域住民の真意と近未来像とはどのようなものかを類推・推察的な側面も含めて辿りつけばと考える。

尚、この研究は、行事内容の特徴と相関が調査研究の対象であるため、各事象が「地蔵祭」か「地蔵盆」に関しての相違には触れることをひかえて、以下の論考では、すべて概念的に地蔵盆というように統一することとした。

I 研究の目的と調査地の選定

地蔵盆の起源には多説あるが、その行事は江戸時代の発生と言われている、今現在も京都を中心と

して近畿圏で盛んに行われている年中行事の一つである。それは、例えば行政や都市開発（観光誘致）を主として大勢の人達の力で行われている行事や、歴史的な有形・無形文化として保存を目的にした行事ではなく、地域住民（町内会）が主体的になって伝承・継承されている地蔵盆に着目して、その行事内容や信仰観念について、独特な事象を探り、その発生・起源を紐解いて行く事によって、少子高齢化のなかで合理性ばかりが持てはやされる今日のような近代化時代の流れにも淘汰されず、先人からの伝承を守り後世へと継承して行く「地域伝統文化」とはどのようなものか、さらには、広義では同じ「地蔵盆行事」でありながら、地域によって、その行事内容に相違（差異）がある。それらの事象を比較考察することで、この地蔵盆行事の相違（差異）を明らかにして、さらにはその相違（差異）が地域独自・独特の地蔵盆文化と言えるかどうかを、地域の関わりという観点からも考えてみたい。

以上のことを研究目的として、先行研究と現地調査から得られる特徴的な事柄を視点とし、その地域における地蔵盆文化を考察するものである。

地蔵盆行事を、その地域の独自・独特の地蔵盆文化として考えていくのに、地蔵盆行事内容の比較は必須であろう。

本研究の調査対象の地域として、京都市北区、福井県小浜市、京都府舞鶴市、を選定した。その根拠・理由については以下の如くである。

京都市内各区の町内会では、どの区内の町内会でもほとんど同様の地蔵盆行事内容である。そのような中で「北区」を選んだのは、①筆者に少し土地勘があり知人がいること、②同区は近年上京区から分かれた区で、古くからの住民が多く、六地蔵の一つである深泥池の「鞍馬口地蔵」が安置されている歴史があること、③その鞍馬口地蔵が安置されている地蔵堂の地蔵盆に50年ぶりに復活した「大念珠まわし法要」の新聞記事に出会ったこと、以上の理由から京都市内では「北区の地蔵盆」（5町内会）を選んだ。

京都市と行事比較をする調査地として、福井県小浜市、京都府舞鶴市を選んだ理由としては、①地蔵盆の先行研究がある地域であり、②京都の近郊で畿内ではなく文化の交流があったとされる地域で、③現在も盛行に地蔵盆が伝承されている地域であること。

以上の選定理由で、福井県小浜市、京都府舞鶴市を比較する調査地とした。さらに、以下の論考では福井県小浜市、京都市舞鶴市を、その立地（地理的）位置から、「若狭地域」と統一呼称して考察する事とした。

II 研究史と課題

本研究の中心となる「地蔵盆」に関する先行研究をみると、地域によっては極めてその数は少ないと言える。以下に先行研究の内容を概観してみる。

地蔵盆を詳細な調査を重ねて網羅的に論述されているのは、滋賀県全域とその他の地域の事例を中心にした『地蔵盆——受容と展開の様式——』（林 1997）であろう。同書は、地蔵盆の行事の様相とその分布、地蔵盆と地蔵祭・地蔵講、地蔵盆と愛宕信仰、地蔵盆の成立等々細部にわたっての論考であるとともに、各地での実態調査も折り込んでいる、「地蔵盆」研究の教科書的な著書であると言っ

ても過言ではなからう。

京都では、地蔵の信仰観念を中心とした「京都の地蔵信仰」（高橋 1982）や、地域（コミュニティ）を中心にした研究として、伏見のまちづくりをかんがえる研究会の『子育ての町・伏見 酒蔵と地蔵盆』（伏見のまちづくりをかんがえる研究会 1987）や「マンションにおける地蔵盆行事の生成——京都下京区西大路ハイムを事例として——」（宇野田 2002）や「地蔵まつりと地域社会」（清水 1980）や「地蔵盆あれこれ」（山崎 2000）や「京都の地蔵盆」（八木 1981）などがある。

「京都の地蔵信仰」（高橋 1982）は、地蔵信仰の主な契機・観念（祈願）としては、「往生（極楽）」、「現世利益」，「死者供養（水子）」と言われているが，「京都の地蔵信仰」は，地蔵信仰の観念を「現世利益」だけとして，地蔵盆はその祭りであり，「町内の安全」・「子どもの安全」を祈願した形式をとっている。

『子育ての町・伏見』（伏見のまちづくりをかんがえる研究会 1987）は，研究会が中心となって伏見の各町内の地蔵設置場所の地図並びに地蔵の写真入りの解説が掲載されている。これは現在も行われている当地区の地蔵盆ガイドブックにもなっているのであろう。特徴的な事柄は酒造りの有名な土地柄から，地蔵盆も酒蔵を祭祀の場所としていることをあげている。

「マンションにおける地蔵盆行事の生成——京都下京区西大路ハイムを事例として——」（宇野田 2002）は，新興住宅地（マンション）における地蔵盆について，その特徴的な事柄の一つである，地蔵の貸し出しについて地蔵盆の聞き書きやアンケートの回答を中心にした論考である。層別グラフの活用などわかりやすい研究論考と言える。

この新興住宅地における「貸し出し地蔵」についての最初の文献は、『巡りのフォークロア——遊行仏の研究——』（松崎 1985）である。松崎は，京都市内にある壬生寺の「出開地蔵」（貸出地蔵）⁽¹⁾に注目して，この習俗的な状況を明らかにした重要な論考と言えよう。

「地蔵まつりと地域社会」，「地蔵盆あれこれ」，「京都の地蔵盆」（こどもの文化研究所）等々は，「地蔵盆」の行事から地域（コミュニティ）を中心として論述されているが，社会学的な論考である。ただ，視点を変えてみると特徴的な事としては，地蔵盆を中心にした地域住民交流の捉え方であり，新しく発生する地蔵盆がコミュニティを主として変容されているという時代・世相が特筆する部分であると考ええる。

新しいものでは，「地蔵盆」（小川 2010）がある。送り盆の後から始まり，地蔵盆を中心にして，盆行事と地蔵盆と愛宕信仰の関係など簡略に書かれた論文と言える。

林の著書以外は，いずれの研究も一箇所の地域での行事（祭祀）内容の特徴的な事柄を捉えての研究であり，簡単に言うとその地域だけでの特徴的な事柄に言及した研究であると言える。

次に，京都市以外の各地の先行研究をみると，若狭小浜での先行研究は，「地縁的祭祀の様態 3——福井県小浜市下根来の事例から——」（林 1992）や「地蔵盆と子ども集団」（服部 2005）と「福井県小浜市尾崎の地蔵盆」（宇野田 2003）と数少なく，刊行書は『化粧地蔵 こどもの神さま』（牧田 1973）に少し記載されている程度である。

若狭湾に面した隣接地の，京都府舞鶴市は『市史』に「地蔵盆」の項に 2～3 行の簡単な記述があるだけで，発表された研究論文としては皆無ではないかと考える。

服部の「地蔵盆と子ども集団」は，地蔵盆の詳細とその祭祀対象についての綿密な調査研究をして

詳細に言及しており、小浜市西津地区の地蔵盆調査を例とした「子ども集団」が中心の貴重な論考である。

宇野田の、「福井県小浜市尾崎の地蔵盆」は、前述の京都西大路ハイムと同じような、小浜市尾崎地区で新しく始められた地蔵盆を、始まった契機や行事内容の詳述と行事が生成していく過程の論考であるが、少子化・過疎化が進む将来の姿についての言及はない。

林の「地縁的祭祀の様態 3」は、小浜市の下根来地区の祭祀について、地区のほぼ全ての信仰祭祀について詳細な調査を基にした重要な論考であり、約 20 年前の貴重な調査資料であると言える。が、この地域は現在限界集落と化しているようである。

この服部・宇野田の先行研究から、共通する事柄に地蔵盆の歴史（起源）・伝播とも考えられるような記述がある。それは『拾推雑話』：宝暦七（1757）年と『稚狭考』：明和四（1767）年の記述からである（詳細は後述）。が、しかしそれは文献史料の引き写しで言及し記述したものにすぎない。その文化（地蔵盆・祭）の起源を辿り、どのような伝播・流布を重ねたかということは、文化の変遷や地域の特徴を明らかにするうえでは重要な事柄と考えるが、いずれの先行研究もまったく不明であると言える。

地蔵盆の準備の中で特徴的でもっとも注目するものの一つに、石像の地蔵に彩色をほどこしている習俗があるが、この習俗も地域によっては、彩色はしない所と彩色はしても著しく違う地域がある。

彩色する地蔵の詳細な先行研究は皆無と言えるほど極めてわずかである。唯一発表された先行研究と言えるであろう『化粧地蔵』（牧田 1973：149-210）では、彩色されている地蔵を「化粧地蔵」として各地での習俗（彩色）を捉えた論考である。しかし、その由来・成立・伝播等々にはふれておらず、論文というよりは紀行文式的でエッセーのような論考と考える。さらには、約半世紀前 1973（昭和 48）年刊行書に掲載の論文であり、現在との比較考察に対して版を重ねての言及はない。地蔵の彩色に関して、京都を中心にした『京都民俗志』（井上 1933）の「習俗」の項に「地蔵を彩色する」という 2～3 行のくだりがあるが、『改訂京都民俗志』（井上 1968）には、その項並びにそのような記述は見当たらない。

本稿においては、京都、小浜、舞鶴での調査から、地蔵の彩色習俗についても各地の特徴（相違）を明らかにしてみたい。

さらに特徴的な事柄で、地蔵盆の最中に「賽銭を強要」する地域習俗について、『年中行事と民俗芸能 但馬民俗誌』（大森 1998）と、調査地とは遠方の九州熊本の事例として「地蔵祭りの変容と生成——熊本城下と新興住宅街の場合——」（牛島 1983）に述べられている。

本研究とは少し離れているが、林英一の「明治政府の近代化政策と地蔵盆」（日本民俗学 255 2009：105-119）は、地蔵盆という呼称の起源・発生・成立について、「地蔵祭り」と「地蔵盆」の関連を、近世から近代にかけてと、さらにはマチ部と非マチ部と、明治政府の、慶応 4 年 3 月 13 日（1868 年 4 月 5 日）太政官布告（通称神仏分離令、神仏判然令）の「廃仏毀釈」を交えての論を展開した論考であり、地蔵盆の成立に関して重要な資料と言える。

地蔵盆の名称については、「地蔵盆」（安達 1989）、「地蔵盆の名称」（伊藤 1959）に述べられている。が、どの説も、決定的な論証（実証）が出来ないというのが結論であろう。

地蔵信仰と地蔵盆に関しての調査報告書については詳しくみていないが、主要な報告書では「大阪

市西区の地蔵信仰調査書」(田野 1992),『ムラと組と家の地蔵盆』(愛荘町教育委員会 2007)がある。どちらの報告書も、広範囲な地域の「地蔵信仰と地蔵盆」についての詳細な調査である。

以上、京都市、小浜市、舞鶴市での地蔵盆関連の先行研究を概観した結果、いずれの研究にも地域での行事において比較し、その関わりや地蔵盆の近未来像に及んで詳述された論考は少ない。

以上の事から、重複するが数箇所の地域での2年間の調査(2010年8月から2011年8月)から、行事内容の地域比較をし、その関わりを明らかにして、地域独自の特徴(文化)として以下に述べてみたい。

Ⅲ 民間信仰や年中行事における地蔵盆と信仰観念

本来は、地蔵信仰や地蔵講・地蔵盆などの発生・成立等々の、基礎的な解釈について述べる必要があろうが、本研究は、地蔵盆行事の特徴を主眼にしているので、紙幅の関係から省略する。ここでは、具体的に各地域の地蔵盆行事内容の考察に入る前に、民間信仰や年中行事における地蔵盆とはどのような位置づけなのかを考えてみる。

尚、先行研究の引用が長くなるのは、地蔵盆とあらゆる民間信仰(塞の神や愛宕信仰)の関係を考えるとともに、地蔵盆独自の形態や変容がどのような過程を経て今日に至ったのかを明らかにするためである。

最初に、地蔵盆と民間信仰の関係については、『宗教歳時記』(五来 1982:167)所収の「地蔵盆の通せんぼ」,「地蔵盆と愛宕信仰」,「六地蔵詣りと辻の地蔵盆」の論考をみると、

(1) 「地蔵盆の通せんぼ」

終戦後間もないころの八月二十三日に、私は但馬の港村(今は豊岡市に合併)の気比というところを、日の暮方に通りかかったら、道に縄が張ってあって、「通せんぼ」をされた……(中略)……子供たちが賽銭を強要するのであった。……(中略)……このとき私は、賽銭というのは塞銭ではないか、とふと思いついた。

こんな語呂合わせのようなことは、……(中略)……柳田国男翁が駆出者時代にまとめられた『石神問答』の残像があったせいかもしれない。……(中略)……この中には、京都の東山の「大將軍」に対して、西山の愛宕山に「勝軍地蔵」があるのは、ことによると塞神を意味するシャグジン(石神)の訛りではないか、……(中略)……大將軍も勝軍地蔵も、京都に悪霊を侵入させないガードマンとしての塞神であることをかんがえさせる、重大なヒントであった。そしてその延長線上で、京都の地蔵盆の謎を解くことができるのである(五来 1982:169)。

五来は、「勝軍地蔵」や「大將軍」の造立の位置から、地蔵盆は塞神(岐神)にヒントがあるとして「塞神の祭り」からの出発であるとしている。地蔵盆の祭祀本尊は「地蔵」であり、その安置されているのは地域(町・村)の境界(入り口)であった。この事からも「塞神」とも言えよう。

さらに「賽銭強要」から

……（前略）……そうすると私が但馬の淋しい村の入口で地藏盆の「通せんぼ」に会ったのは、塞銭を強要されるということよりは、他郷から入るものを塞がるという、塞神の行為であって、慈悲深い地藏様のなさることではなかった。賽銭を塞銭としたのは、……（中略）……地藏尊への賽銭とおもったのは、塞神への塞銭だったのである（五来 1982：169）。

五来は、「塞」と「賽」の意味から、境界の守り神の塞神と地藏盆の位置づけを示したのである。⁽²⁾

(2) 「地藏盆と愛宕信仰」

引き続き五来の論考をみていくが、「文部省緊急民俗資料調査」の中の「愛宕信仰」では、

地藏盆は近畿地方から東海地方にかけて盛んであり、その他の地方では盆の二十三日、二十四日を「うら盆」というところが多い。……（中略）……それが何故かということを考察した論考を私は見たことがない。……（中略）……その中で福知山市字雲原、小字西石では、二十四日盂蘭盆には愛宕様で草がらを集めて枝木をくすべる。大籠の火をたいておどった。とあるのは注意をひく。その他は多く地藏盆とあるが、兵庫県の部では二十四日盆またはマンド（万燈）といって、かならずしも地藏盆とはいわない。加東郡社町鴨川などでは、二十四日、おくり盆。愛宕さん。……（中略）……また奈良県東吉野村三尾では、二十三日を愛宕祭、二十四日を地藏祭とする。このように地藏盆は愛宕の火祭りに深い関係があることは注意すべきことで、福井県織田町細野では、二十四日、裏盆、昔は愛宕山「カセ上ゲ」をした。……（中略）……この様な事例から見て、盆月（旧七月）の二十四日に地藏尊をまつるのは、愛宕の本尊としての地藏尊をまつることで、お盆とは直接のかかわりはなかった。そのために旧七月二十四日には万燈をとぼすところや、火祭をするところが多いのである（五来 1982：170-171）。

としている。「民俗資料調査」の各地の事例から、庶民（民間）信仰の「火防・盗難」をまもる「愛宕信仰」との関連を示している。

さらに、地藏の縁日について

修験道華やかなりし平安時代には、愛宕修験の夏峯入は、四月八日または十五日から七月十五日までの、愛宕五峰の花供回峯であった、これが地藏菩薩の縁日の七月二十四日に出峯蓮花会と柱松験競がおこなわれて、愛宕の地藏祭と愛宕火が一般化したのであろう。これは京都を中心に畿内にひろまったために、地藏祭は地藏盆という形でのこり、京都・山城・大和・近江・摂津・和泉等に濃密に分布することになった。ところが中世になると修験道の入峯期間の短縮はおこり、六月十五または六月二十四日に出峯したので、旧六月（新七月）の愛宕火が全国的にみられるようになったものとおもう。したがって旧七月二十四日（現八月二十四日）の地藏盆は、お盆とは別の愛宕信仰にもとづく地藏祭であった（五来 1982：173）。

と述べている。

(3) 「六地蔵詣りと辻の地蔵盆」

京都での地蔵祭に、京都七口（現在は六口）の六地蔵祭と、町内毎の地蔵祭の関係の論考から

京都の地蔵盆は京都七口（現在は六口）の六地蔵祭と、町内毎の地蔵祭（天道大日如来祭をふくむ）との二つから成っている。これはどのような関係にあるのであろうか。

この二つの地蔵祭は塞神祭の変形であるから、かならずしも盆月の七月（今の八月）でなければならないことはない。もしこれが愛宕地蔵と関係がなければ、疫病のはやりやすい三月（季春）か六月（季夏）であつたろうとおもう。六地蔵祭については『源平盛衰記』（巻六）の「西光卒都婆の事」に、……（中略）……とあつて、その祭の月日は別でない。しかしこのような七街道の七口には、京都に悪霊邪神を入れしめない塞神や岐神、道祖神がまつられていたことはたしかで、これを六地蔵におきかえたのが、西光の六地蔵であつた。……（中略）……そのためには、お巡りさんの検問のように、三体ずつ道をはさんで六体まつることがたしかであるし、地蔵の異名「六道能化」にも合致するので、六地蔵となつたのであろう。

もう一つの辻々の地蔵も、町内に悪霊邪神を入れないための塞神（道祖神）が地蔵化したもので、この祭もお盆のような特定月のものではなかつた。したがってこれをお盆月の二十四日にまつて地蔵盆にしたのは、愛宕地蔵の祭と習合したためと推定される（五来 1982：173-174）。

としている。最後に「この変化のプロセスに地蔵祭や地蔵盆があるが、これがお盆の一部と誤解されるようになったのは、愛宕山の地蔵信仰が加わつたためと、私はかんがえるのである」（五来 1982：175）と結論づけている。

さらに、「愛宕信仰と地蔵」の関連の論考をみると、『京都愛宕山と火伏せの祈り』（八木透編 2006）の第六章「くらしのなかの火」の「松上げ」では、

愛宕の火祭りを代表する行事は、何といっても「松上げ」です。……（中略）……ところで、松上げは八月二十四日の夜に行われるという例が多く見られますが、これは地蔵の縁日である二十四日に由来するものだと考えられます。二十四日は地蔵祭がおこなわれる日です。愛宕の本地仏は勝軍地蔵でありましたから、その影響で、地蔵祭の日に松上げが行われるようになったものと思われます（八木 2006：186）。

としている。愛宕の代表行事である「松上げ」の行事日（二十四日）と地蔵の縁日（二十四日）は同じ日であると言及する。さらに、地域での松上げと地蔵の関連について、京都市での「広河原」と「雲ヶ畑」の例から

広河原の松上げの大きな特色は、行事の一週間ほど前に、ふだんは佐々里峠の地蔵堂に祀られている地蔵を村内の観音堂に移すことです。この地蔵は松上げが終わるまで村内で祀られ、やがてまた峠のお堂に戻されます。広河原の松上げには、地蔵祭としての松上げがよく現れていると思います（八木 2006：188-189）。

とする。広河原の例からは、「地蔵の動座」から松上げが「地蔵祭」の行事と深い結びつきがあることがよくわかる。もう一つは、地蔵の安置場所である「峠の地蔵堂」から、地蔵と塞神の関係をよく現していると考えられる。もう一つの雲ヶ畑では、

一方、加茂川の源流にあたる北区雲ヶ畑でも、八月二十四日に村内の二ヶ所の愛宕山とよばれる場所で松上げが行われます。ただ雲ヶ畑の松上げは、山の頂に百束余の松の割り木で文字の形を作り、それに点火するという形態をとっています。これは愛宕信仰に根ざした松明行事としての松上げと、五山送り火に代表される盆の送り火が習合した典型例といえます（八木 2006：189）。

雲ヶ畑では、地蔵との関連性はないのであろう。盆の送り火との習合であるとしている。また「愛宕信仰の行事」が時代の移り変わりとともに、その形態の変化に言及している。まとめとして

このように、松上げは火の神として信仰を集めた愛宕信仰に端を発し、さらに愛宕と深い関わりのある地蔵信仰とも結びついた。……（中略）……そもそも京都周辺で、今日「地蔵盆」の名で親しまれている行事も、明治以前は「盆」ではなく、地蔵菩薩を祀るための行事で「地蔵祭」とよばれていました。これも夏に行われる種々の民俗行事が盆行事のなかに吸収されていった例のひとつであると思われます（八木 2006：190）。

私は大文字送り火と松上げは基本的に起源と目的を異にする行事であると考えています。「送り火」は、あくまでも盆行事の一環であり、先祖の霊をあの世に送るための火の行事です。しかし松上げは、愛宕の本地仏である地蔵を祀るための行事です。……（中略）……さらに、明治の神仏分離によって、愛宕と地蔵信仰のつながりが表面的には消失してしまうと、さらに松上げの本来の意味は忘れ去られて、多くの行事が盆の送り火の行事として認識されるようになっていったと考えられます（八木 2006：194-195）。

としている。以上、五来重と八木透の論考から、民間信仰と地蔵盆の関連をみてきた。

五来の「地蔵盆の通せんぼ」と「六地蔵詣りと辻の地蔵盆」では、「塞」と「賽」の意味から、境界の守り神の「塞神」の祭りが「地蔵盆」となったであろうとしている。「地蔵盆と愛宕信仰」では、愛宕火祭りの行事日と地蔵の縁日の祭り日（どちらも二十四日）から、地蔵祭や地蔵盆があるが、これがお盆の一部と誤解されるようになったのは、愛宕山の地蔵信仰が加わったためと根拠を示している。

ただ、現在の京都で盛行している地蔵盆行事からは、愛宕の地蔵信仰や行事である「火祭り」の側面は希薄になったのか、実態としてはみえてこない。

八木の論考でも松上げは、愛宕の本地仏である地蔵を祀るための行事であるとする。「明治の神仏分離によって、愛宕と地蔵信仰のつながりが表面的には消失してしまうと、さらに松上げの本来の意味は忘れ去られて、多くの行事が「盆の送り火」の行事として認識されるようになっていった」（八木 2006：190）と考えられると結論を示している。

(4) 地藏盆の信仰観念（祈願）

民間信仰や年中行事の中での地藏盆について考えてきたが、それでは地藏盆の信仰観念（祈願）とは、どのようなものを一般的な理解から考えてみる。

『仏教行事散策』（中村 1989）では、

なぜ地藏盆が子の祭りであり、同時に子供の健康が念じられるのかというのも難しい問題である。地藏尊が子供の守護者であるというのは、……（中略）……子供の亡骸をそれまでのように粗末に扱うべきでないという反省が室町時代に生じ、それが六道の衆生救済の地藏菩薩と結びついて成立したものとも考えられる（中村 1989：218）。

とする。この説では、子供の冥途である「賽の河原」での子供たちを地藏菩薩が助けるという説話から「死者（水子）供養」に基づく説であろう。もう一つの道祖神と地藏の習合説では、

道祖神は塞の神（さえのかみ）ともいい、村境や峠、辻にあって悪霊の侵入を防ぐ役目をなす。一方、地藏も六道の辻に立ち、衆生を救済すると考えられていたため、両者は早くから結びついたらしい。……（中略）……ただし、この地藏と塞の神との習合は、むしろ地藏盆において、なぜ「家内安全」「町内安全」が祈念されるのかという疑問の答えとしてのほうが説得力がある。というのも、町や家の内側に悪しきものが入り込まないように防御するのは、本来、地藏ではなく塞の神の役目だからである（中村 1989：218-219）。

塞の神の本願から地藏との習合により、地藏の祭りである地藏盆での信仰観念（祈願）が、「家内安全」や「町内安全」の現世利益になったとされる説である。さらに、地藏盆行事の中で、各地域において行われている「百万遍念仏の数珠繰り（回し）」に言及して、

そしてこの家内安全などの願いをさらに確かなものとするために、百万遍念仏の数珠繰りが行われるのであろう。百万遍念仏とは本来、往生を期して一人で、あるいは数人で集まり自身の申した念仏を互いに融通しあって百万回の念仏を唱えるものであった。……（中略）……江戸時代には数珠繰りや数珠そのものに呪術力があるとされて、無病息災・悪疫退散、さらには村内・家内の安全が祈られるにいたっている。この祈念の内容はまさに地藏盆のそれと同じであり、地藏盆に百万遍念仏が取り込まれるのはまったく自然の成り行きといえよう（中村 1989：219）。

と述べている。

「地藏盆の信仰観念（祈願）」については、「道祖神（塞の神）」との結びつきから、信仰の観念である「往生」、「死者供養」、「現世利益」の中から、「町内安全」、「家内安全」という「現世利益」が中心の観念（祈願）に至ったのであろう。さらには、「地藏盆」と「百万遍念仏と数珠繰り」の関係も明らかにしている。

「百万遍念仏とは本来、往生を期して」の念仏であったが、「数珠繰りや数珠そのものの呪術力」か

ら「現世利益」の観念（祈願）となったとしている。

IV 地蔵盆の諸相

(1) 北区鞍馬街道口深泥池地蔵堂の地蔵盆

深泥池（みどろがいけ、地元ではみぞろがいけと言う）は、京都市北区上加茂深泥池町に所在する池で、俗に深泥ヶ池などとも記す。地元に住む人たちは、これを「みぞろがいけ（御菩薩池）」と呼んでおり、蛇足であるが、古くはこの池のまわりには民家が少なく、「タクシーの怪談」等心靈スポットとして有名であるらしい。

現在は、市内中心部までの市バスや地下鉄での利便性と静かな環境から、新興住宅地として若い世代の住民も増えた高級なベッドタウンでもある。



写真1 京都市北区深泥池



写真2 鞍馬街道口深泥地蔵尊（2代目）、初代は地下鉄「鞍馬口駅」の「上善寺」に動座した（明治期）

深泥池の地蔵の歴史は京都の六地蔵の建立にまで遡ることができる。『源平盛衰記』巻六によると、保元年間（1156～59年）西光法師が都の街道の入り口に、六体の地蔵を安置し、「廻り地蔵」と名付けたことに由来するという。

即ち、奈良街道（伏見六地蔵）、西国街道（鳥羽地蔵）、丹波・山陰街道（桂地蔵）、周山街道（常盤地蔵）、東海道（山科地蔵）とともに、この若狭街道（鞍馬口地蔵）の深泥池が選ばれた。これは、仏教の六道に見立てて一体ずつ、各街道の入り口に分祀したのが、現在の六地蔵巡りに引き継がれている。このように、街道の入り口に地蔵尊が安置されたのは、昔から疫病や悪霊等々は街道を通ってやってくると考えられており、その侵入を防ぐという意味も含まれていた為である（深泥池地蔵堂の起源・由来より）。

以上が、深泥池の地蔵堂の地蔵菩薩即ち鞍馬口地蔵の起源・由来である。鞍馬口地蔵は、明治時代までこの地蔵堂に祀られていたが、現在は市営地下鉄鞍馬口駅の「上善寺」に動座されている。現在の深泥池地蔵堂は、この地区の町内会が管理していて、その信仰形態も民間信仰として地域に継承されている。

「地蔵盆行事」について述べる前に紹介しておきたい事柄として、この歴史ある地蔵堂で、地蔵の

縁日である旧暦七月二十三・二十四日に行われている地蔵盆の「大念珠まわし法要」が50年ぶりに復活した。筆者は現地で偶然この復活を知ったのだが、これに出会うことができたことも何かの因縁を感じざるを得ない。



写真3 京都新聞・市民版の記事(2010・8・19付)



写真4 「50年ぶりに復活した大念珠」

以下に、2010年8月19日付「京都新聞・市民版」の記事を紹介してみる。

京都市北区の深泥池地蔵堂で二十三日に行われる地蔵盆で、半世紀ほど途絶えていた大念珠まわし法要が復活することになった。「京の六地蔵」の一つ「鞍馬口地蔵」が明治初期まで安置されていた同地蔵堂では、かつて地蔵盆も盛大であった。だが五十年ほど前から念珠法要が絶えたという。

住民によると、念珠まわしでは江戸末期の1865年に地元の講が寄進した念珠を用いる。だが、ひもが切れ虫食いなど傷みが激しく、修繕が懸案であった。地域では近年、宅地開発が進み新住民がふえており、地域の姿を知る機会にしてもらおうと、半世紀ぶりに復活させることにした。念珠は直径5mと2mの2本あり、今年7月に左京区の仏具店(田中仏具店)を通じ修理した。法要は二十三日午前十時から、古式にのっとり、大人と子ども約40人が輪になって一つの念珠を手で繰り、大きな珠(親珠)が自分の順に廻ると拝礼する。

地域に住む世話人代表の稲井新郎さん(80歳)は「地蔵盆のたび、念珠の修理が気になっていた。当地の地蔵は古い由緒もあり、昔ながらの念珠まわしができるのがうれしい。大勢の子どもに集まってほしい」と話している。

次に、地蔵盆前日の二十二日の準備と当日二十三日の行事次第について紹介する。

地蔵盆の準備として町会の長老達で地蔵を祠(御堂)から出し、御身を洗う。古くは真綿で洗っていたらしいが、現在では、たわしや洗車ブラシで洗っている。きれいになった地蔵の首に、赤白の胸あて(ヨダレかけともいう)が結びつけられる。以前は、乳児や幼児のいる家から胸あてを持って来ていたといい、その胸あてには、乳幼児の名前・生年が記されていたということである。

町会役員たちが中心となり、地蔵堂の前の広場にテントを張り、地蔵盆用の提灯を飾り付け、地蔵像(石像)の前にお供物等々を飾り付ける。ここでは、ひょうたん型の珍しい形をした京野菜の「鹿ヶ谷かぼちゃ」が印象的であった。前日の準備は以上の如くである。

当日の朝10時になると、子供たちが中心の大念珠まわし法要が始まる。このとき、念仏は僧侶の読経・念仏ではなく、町会役員による念仏である。その回数を記録しておくための「木札」も用いら



写真5 「念珠は2本5mと2m（直径）」



写真6 「50年ぶりに復活した大念珠まわし法要」の子ども達の様子



写真7 新しい頭巾と赤白の胸あて（涎掛け）できれいに飾り付けられる



写真8 地蔵盆の主尊の前に御供物を飾る（京野菜の「鹿ヶ谷かぼちゃ」が珍しく印象的）

れる。11時になると、スーパーボールすくいやヨーヨーすくい、金魚すくいといった子供たちの遊びが始まる。その後、昼食として町内会の婦人達による特製カレーライスや本物の竹を用いた流しそうめんなどが子供たちにふるまわれた。3時には、マジックショーや福引・スイカ割りが行われ、おやつやアイスが配られた。夜の7時からビンゴ・ゲームが行われ、当たった子供には賞品も与えられていた。7時半になると、「尼講念仏」が始まる。この法要では、大人による大念珠まわしが行われる。

この地蔵盆は毎年、地蔵の縁日である旧暦七月二十三・二十四日に行われている。「時代がどんなに変化しても、この歴史ある地蔵堂の地蔵盆だけはできるだけ古くからの祭祀を伝承して行きたい」という世話役の力強い言葉も聞かれ、地蔵盆にかける熱い意気込みが感じられた。夕方に行われる「尼講念仏」は時間の都合上、今回は見る事が出来なかったので次回の調査としたい。

以上が、鞍馬街道口深泥池地蔵堂での地蔵盆行事内容である。

(2) 福井県小浜市西津地区の地蔵盆

西津地区は人口 3,362 人・世帯数 1,338 世帯で、東は天ヶ城山から南方に延びる枝峰で限られ、北

は甲ヶ崎，西は風光明媚な小浜湾に面する。地名の由来については，かつて港として栄えた小浜湾東岸の入江の最奥阿野尻（古津）の西の津であるところから西津と称されるようになった。市の中心部に近く交通の利便性もよく，住宅・商業地区として現在に至っている（西津公民館から情報提供：2011/08/22）。

この西津地区は12区に分かれていて，安置されている地蔵像は「37体」，地蔵盆会場は「31箇所」である（若狭おばま食文化館から資料提供：2010/8/23）。



写真9 若狭小浜市内の「お地蔵さんマップ」



写真10 小浜市西津地区の地蔵マップ「西津の化粧地蔵」

以下，聞き取り資料を交えて「地蔵盆行事」をみていく（西津小松原区川西 本村昭吾氏より情報提供）。

地区の数より地蔵像の数が多いのは，1体／区ではなくて例えば下竹原区など地区の辻々に安置して合計6体であると言われるからである。

西津での地蔵盆の主体となるのは，組織的につくられた「子ども組」の存在であり，少子化とはいえ，現在でも西津では準備から「子ども組」が中心の地蔵盆が行われている。その形態としては，明治時代のころからである（本村氏の先輩で船井三蔵氏からの伝承）。

古くは（昭和30年代初頭まで），男子だけで構成されていて年齢は14歳以下（中学2年）であった。（戦後は少子化のために，昭和30年過ぎから女子の参加も認めたが，最年長者は小学6年までと限定されていた）。またこの集団は，年長者から「大将」「中將」「少將」というような軍隊的な呼称の階梯組織であった。この「子ども組」が地蔵盆祭祀のほとんどを執り行っていたということである。

地蔵盆の準備は，第二次世界大戦時も毎年欠かさず行っていたが「お堂」を建てる事と紙で作った「幡」と呼ばれる飾りつけは控えていた。（「お堂」と「幡」について詳しくは後述する）やはり，戦時という世相より「派手な」事柄は出来るだけやめようという各地区の申し合わせだったらしい。尚，地蔵盆の開催に関して当局からの圧力はなかったらしい。

この「子ども組」について特徴的なことに，今回（2011年）調査地の西津新小松原区火除町の地蔵盆で，「この子が今年で最後（14歳）なので後は子どものいない地蔵盆だ」，さらには「来年から町内会も80過ぎの女性が多くて飾り付けの力仕事は大変だあ」，「あと何年出来るかなあ……」と，地蔵盆すら危ぶまれるとのお話を聞くと，時代の流れとはいえ少子高齢化がもたらす，典型的な伝統



写真 11 七軒町のお堂



写真 12 仲の町のお堂（現在は写真 11 の七軒町のお堂と 2 箇所だけになっている）

的行事の希薄化例の一つであろうと感じた（町内会女性役員 3 名から情報提供）。

次に、まずは地蔵盆の準備からであるが、「盂蘭盆会」の前 8 月 10 日頃に、地蔵像を洗う井戸の底石を探しに行き（場所是对岸の仏谷海岸や小浜公園海岸）、集めた石を井戸の底に敷く。これは古い石は穢れているので新しい底石を敷き清らかにするという意味合いがある（この事は、地蔵の彩色も同様であるらしい）。次に、「盂蘭盆会」が終わってから、地区の各辻角の祠に安置されている「石仏の地蔵」を取り出し、海に持って行きその彩色を洗い落とす。古くは、その後町内に持ち帰り井戸水で再度洗い清めた。これはすべて子どもの仕事であるらしい。しかし現在では少子化で子どもがいなくなり、井戸も水道に変わったこともあって、祠からの地蔵の運搬等々は町会の役員が行っている。



写真 13 小浜市西津地区の「化粧地蔵」



写真 14 小浜市西津地区の「男地蔵」と「女地蔵」

石仏の地蔵を乾かしてから、各町会の子どもたちが地蔵像に着色・彩色する。古くはペンガラや岩絵具で（群青・緑青・黄土等々）あったが、現在ではエナメルやペンキなどで自由な色を使って地蔵像に着色・彩色する。この地蔵を「化粧地蔵」と呼んでいる。最近では、地蔵を 2 体安置している町会が多く、「男地蔵と女地蔵」としている。男地蔵のほうが大きくて、その彩色も派手に塗り、女地蔵は小さい石像で彩色も穏やかな感じを受ける。

尚、この化粧地蔵という地蔵像に彩色をする慣習は、前出の本村氏の話では「この西津の長老であった船井三蔵さんの時代からあったと聞いている」とのことであり、さらには「船井三蔵さんが存命ならば 120 歳以上であるから、1890 年（明治 23 年）かぁ……古いなぁ」と教えてくれた。しかし当時の彩色そのものが伝承して今に続いているのかどうかは定かではないらしい。



写真 15 小浜市西津地区の「幡」



写真 16 小浜市西津地区の「アニメ調の行灯」



写真 17 小浜市西津地区の「行灯」

さらに準備で「行灯」や「五色幡」を、やはり1週間前ぐらいから用意をする。行灯には、アニメ漫画などを描き、五色幡は白地に黄・赤・緑・青の順で貼り付けた和紙に、墨書で「南無地蔵大菩薩」と書いてある。幡づくりで墨書は親の仕事の場合もある。

この後は、21・22日にお堂を組み立てる。この部材は各町会が会館とか倉庫を持っていて、その倉庫で保管している。このお堂の組み立ては力仕事であるため、町会役員等々（大人）が作業を行っている。お堂は、地蔵像を祀るお堂そして祭壇を置き飾り付けるためと、地蔵盆前日から子どもたちが地蔵盆飾り等々を守るために寝泊りする場所として設置される。戦前は、各町会で1箇所ずつ建てられたが、ここ何十年前からは少しずつ減り現在は「仲ノ町のお堂」と「七軒町のお堂」の2箇所だけになった。お堂が減りつつある原因は、子どもたちが少なくなり寝泊りする子がいなくなったり、お堂が火事などで消失したり、老朽化して補修できなくなったり、高齢化して組み建てられなくなった等々である。

お堂がない町会は、現在では各地区に町会会館が建てられているので、個人宅ではなく、会館で祭壇・飾り付けを行っている。

お堂や会館の屋根には笹（大きいものは4~5m）が取り付けられて、この笹に五色幡、五色幡よりさらに大きな「白い幡」が取り付けられる。白幡には大将や中將それぞれが直筆で「南無地蔵大菩薩」と書き込んで「大将幡」として署名をしている。古くは22日の夜に、この「大将幡の奪い合い」の攻防と前述の「行灯破り」があったらしい。この事については、いくつかの先行研究で論じ詳しく言及しているので詳述はさけるが、現在では一切行われていない。

さらに、「賽銭の強要」（詳細は本稿19）も同じようにこの西津地区において戦後は中止しているということを書き加えておく。

西津地区の地蔵盆は明記された式次第はない。何年も続いたものであるから、地蔵盆の準備前に役員の打ち合わせで、行事内容が口頭で確認されるとの事である。

地蔵盆当日である23日の行事は、朝早く（地区によっては朝6時過ぎ）から、子どもたちが太鼓や鉦を打ちながら「ナームジゾウー、ダーイボサツ」と繰り返し囃している。そして、前を行く人に「参ってんの、参ってんの」と呼び込んでいる。

筆者も、お賽銭をあげてお参りをしたら、子どもたちが「あーりがとさん、あーりがとさん」と全

員で囃したてた。ちなみに、筆者の調査の話者と案内をして戴いた本村氏の小松原区川西では、子どもが男子3人・女子6人の9人であった。地域では一番多いらしい。



写真18 子ども達が太鼓や鉦で「ナームジゾウー、ダーイボサツ」と囃したてて



写真19 小浜市西津地区の地藏盆飾り（最上部に地藏を祀る）

午前10時頃と午後の3時頃には、子どもたちにおやつが出る。夕方から夜にかけて、大人たちによる念仏が始まる。古くは「念仏講」によるものであったが、「講」組織がなくなったので地域の役員やお年寄りによるものである。念仏の前にお堂の少し後ろ側で飲食を始めるが、途中から飲食の場に行く人がいたり自由な感じで楽しんでいるようである。

地藏盆も終わりに近くなり、子どもたちは学年別に分配されたお賽銭を貰って解散になる。このお賽銭もある程度は、来年の地藏盆費用の一部として積み立てておくらしく、残りを子どもたちに分配している。

祀っていた地藏は、地藏盆役員と年番（当番）により元の祠に戻し安置する。地藏盆後の地藏像や祠の管理は、町内で順番を決めて、週に一度当番が地藏像や祠の掃除・お茶・お線香・お灯明をあげてお守りしている。

あくる日（24日）の朝に役員等々で、お堂を解体（お堂がない地区は会館）整理して祭壇等々を、小屋（会館の中）に収納する。同時に、お供えを少しずつ各戸に分けて配る（これは大人の仕事である）。この供物配りとお堂（会館の祭壇）解体整理が終われば、その年の西津地区の地藏盆は全て終る。

新しく始めた行事に、2011年から西津地区「31箇所」地藏盆会場での「地藏盆コンテスト」を行っていると言う事である。主旨・目的は、この伝承を絶やすことなく後世に継承する事と地域の活性化のため、さらに独自の「西津の地藏盆」を広く発信するため、地域の親睦と発展を主とする行事である。

さらには、少子高齢化という時代背景から、この伝統行事の衰退を危惧して地域住民の積極性を高揚させようという事も隠れた目的の一つでもあるらしい。地藏盆コンテストの審査内容は、地域連合の役員数名により、数項目で採点を行うというものである。項目については公表していないという事で不明であった。尚、コンテストに順位はなく、優秀賞を数箇所選定するらしい。

この地藏盆コンテストは、地域住民が主体的に行っている。コンテストの結果や地藏盆に関する記事は、「西津公民館だより」に掲載して広く発信している。

(3) 京都府舞鶴市の地蔵盆

舞鶴市の地蔵盆行事も、隣接地の小浜市と類似した事柄が多々あるので、紙幅の関係から特徴的な事のみ言及としたい。

舞鶴市での地蔵盆は、西舞鶴が中心で東舞鶴には地蔵盆の伝承は少ないらしい。舞鶴には『市史』等々の文献からは地蔵盆に関してわずかに数行記述があるぐらいで、管見において先行研究は見当たらない。文字による伝承はないが、舞鶴の地蔵盆の祭祀には他の地域にない独特のものがある。

舞鶴の地蔵盆も古くは23・24日であったが、他の地区（京都や宮津）と同様に、地蔵の縁日（24日）の前の週末（土・日曜日）に行う地区が増えてきている。ただ、町内会の意向と準備する人がいる地区は、昔ながらの23・24日で行事を行っているが、少数地区というのが現状である。



写真20 西舞鶴の地蔵盆飾り。最上部中央には金色の「御厨子」と「地蔵菩薩立像」を祀る



写真21 祭壇最上部に「石仏の地蔵」。この地蔵像が普段は辻角の「祠」に祀られている

祭壇飾りの場所も、古くはその年に「新盆」の「精霊迎え」をするお宅で地蔵盆を行っていたらしい。最近では、住宅事情等々もあり町内会館や集会所（1箇所／地区）もあるので、ほとんどの町内会では会館で行っている。

舞鶴市の地蔵盆で特徴的な事は、祭壇飾りの最上段に祀る通称「御厨子」とか「厨子」と呼ばれるものである。この「金色の御厨子」は京都・若狭地域や全国的にみても、舞鶴だけの特徴であり伝承であろう。また、その祭壇飾りで、中央に「金色の御厨子及び地蔵菩薩立像」を安置するのは珍しく、これも舞鶴市だけの特徴と言えよう。



写真22 舞鶴市（西舞鶴）の地蔵盆飾り。中央部最上段には「金色の御厨子」と厨子の中には「地蔵菩薩立像」

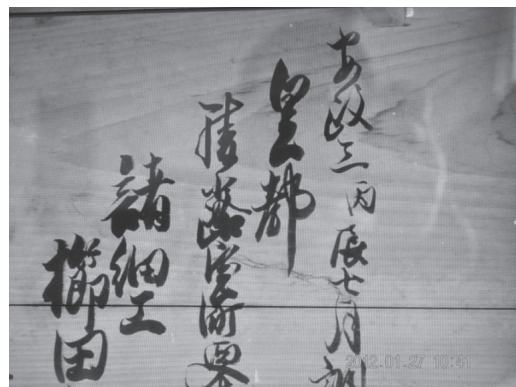


写真23 舞鶴市（西舞鶴）「御厨子と地蔵菩薩像」収納箱蓋の「墨書き」から「安政三年」の年号が読み取れる。ただし舞鶴の物という確証はないが、現在も伝承しているのは事実である

以下に、御厨子（厨子）等々の祭壇飾りについて、少し詳しく見ていくことにする。旧舞鶴市（旧舞鶴は西舞鶴のこと）の地蔵盆飾りは市内全般的に同様であり、写真資料のように最上段中央の「御厨子」に「地蔵菩薩立像」が安置されて、花瓶・蠟燭立て・香炉・高坏など金色の光沢で荘厳な祭壇である。御厨子は地域によっては金箔仕上げで古くからの伝承である。御厨子以外は真鍮造りの仏具である。ちなみに、この御厨子の伝承は江戸時代からであり、竹屋町の御厨子収納箱の蓋には「安政三年七月」の墨書がみえる。さらには、明治時代からの地区が多く、例えば本町では明治44年、丹波町では明治32年と御厨子の収納箱蓋に墨書があり、さらに祭壇幕に年代が染め抜かれていた。

このように民間（町内会）を中心にして守られている、既成仏教教团的な飾りの、この地蔵盆は他の地域には類をみない舞鶴市だけの特徴的なものであると言えよう。

V 地蔵盆の地域別特徴と比較

この章では、各地域の地蔵盆行事について調査してきた事柄を、類別・整理してみる。その上で、地域によっての相違（差異）について以下に考えてみたい。

表1 地蔵盆行事内容の地域別比較表

	京都市	小浜市	舞鶴市
①地蔵盆の発生や起源	江戸時代（貞享2年）	江戸時代（明和4年）	江戸時代（安政3年）
②地蔵盆の信仰観念は	現世利益	現世利益	現世利益
③地蔵盆の主願は（現在）	子供の健全な成長と町内の安全	子供の育成と町内の親睦や健康	地域住民の絆と町内の安全と住民の健康
④地蔵像や祠の管理は	近隣の住民	町内会（月当番）	町内会（月当番）
⑤地蔵盆行事日の変遷	8月23・24日→土・日	8月23・24日	同左→土・日（一部）
⑥地蔵盆行事の主体は	子供	子供	子供
⑦地蔵盆行事の場所は	駐車場や道路	地域会館や地蔵小屋	地域の自治会館
⑧地蔵盆行事の準備は	全て町会役員や長老	ほとんど子供が主体	町会役員と子供
⑨地蔵盆行事の費用は	寄付	寄付と町会費一部	寄付と町会費一部
⑩地蔵盆の飾りは	祠や石像の前に香華・供物を置く	会館内に段飾りで石像や香華・供物を置く	段飾りで最上部に金色の御厨子・仏像
⑪地蔵像の彩色は	ほとんどしない、彩色も顔に白粉と紅	ほとんどする、石像全体の極彩色調の彩色	同左

地蔵盆の発生や信仰観念（主願）、盆行事の主体や場所・準備・費用等々に関して11項目別（無作為）に分類表にして比較をしてみた。

その中で、①の発生や成立は京都市が一番古く、小浜市、舞鶴市の順である。京都や若狭での発生・成立という明確な根拠は少ないが、資料（史料）的には、例えば、京都市歴史資料館の「近世町方文書」や『日次記事』貞享二年（1685）の「洛下童子地蔵祭」に盛行の記述がある⁽³⁾。若狭では、『稚狹考』明和四年（1767）の記述より、地蔵盆は明和四年「次第に増長繁華」という件からその盛行ぶりがうかがえる。

この「地蔵盆」は、京都から若狭へ伝承・伝播したと考えられる。広義では、地蔵盆という民間信仰の習俗は伝承・伝播したのであろうが、この習俗の細部（例えば行事内容）に関して伝播と言える

資料（史料）は数少なく論拠に乏しい。その理由の一つは、各地域のほとんどが先人による口承伝承によるものだからであろう。

②・③は、信仰観念とその祈願内容についてである。各地域とも等しく現世利益であるのは、本稿のⅢ（４）「地蔵盆の信仰観念」で地蔵盆の信仰観念（祈願）とは、どのようなものかについて詳述しているの、ここでは結論的に『仏教行事散策』（中村 1989：218-219）から、地蔵盆の信仰観念（祈願）については、「道祖神（塞の神）」との結びつきで、信仰の観念である「往生」、「死者供養」、「現世利益」の中から、「町内安全」、「家内安全」という現世利益が中心の観念（祈願）に至ったのであろう。さらには、「地蔵盆」と「百万遍念仏と数珠繰り」の関係も明らかにしている。

「百万遍念仏とは本来、往生を期して」の念仏であったが、「数珠繰りや数珠そのものに呪術力」から現世利益の観念（祈願）となったとしている説に合致していると考えられる。

「塞神」との観点では、京都の例では「深泥池地蔵」は六地蔵の一つで、鞍馬街道口を守る地蔵尊であり、若狭小浜は「賽銭強要」（現在は廃止）に見られる、村の入り口を守る地蔵尊ということから、「現世利益」の「町内の安全」に合致・符合している。

しかし、「賽銭強要」については、京都にはその習俗は見当たらない。ただ、若狭や丹後の隣接地の但馬に関しては『年中行事と民俗芸能 但馬民俗誌』（大森 1998）の「地蔵盆と賽銭強要」に

……（前略）……八月二十三日には、道の辻の地蔵さんの前に、通せんぼをして道に縄が張ってあり、この縄をとってもらい通過するためには、賽銭をださなければならなかったという。（大森 1998：234）

とある。但馬の地蔵盆については詳しく調査をしてないので、発生年代についてはよくわからないが、若狭も但馬も同じような習俗があったのは事実のようだ。さらに九州熊本の「地蔵盆」にも同様の習俗が報告されている⁽⁴⁾。

次に、④～⑧については、京都も若狭もほぼ同様の内容である。

⑨地蔵盆の費用は、京都（北区）では寄付で賄っているということであった。市内全体に及んでの調査を行ったわけではないが、確かな事として本稿の調査地では寄付であった。

小浜・舞鶴市では、大事な年中行事の一つであるので、町会費に「地蔵盆費用」として計上しているということであった。（地区それぞれの事情があるので詳述はさけない）

⑩地蔵盆の飾り付けと⑪地蔵像の彩色であるが、この項目が、本研究の「地域の特徴」として、その相違（差異）が顕著にあらわれている習俗と言える。

最初に、京都と若狭での地域の相違を、「地蔵盆の飾り付け」からみてみたい。次に、「地蔵像の彩色」については、路傍の「石の地蔵像」に彩色したものを、若狭や丹後では、「化粧地蔵」と呼び、その彩色（着色）は、この地域（若狭・丹後）の独特の習俗と言える。

以下に、調査地の京都・若狭（小浜市・舞鶴市）での「地蔵盆の飾り付け」と「化粧地蔵」を写真資料（詳細は本稿Ⅶ）で示してみる。

VI 行事内容の側面からみる地域の特徴と相関

前述の分類表のように、京都と若狭では地藏盆行事内容には特徴的な相違がある。その中でも、顕著な例として、「地藏盆の飾り付け」と「地藏像の彩色習俗」を取り上げてみた。

最終章としてその例の特徴から、地域の相違とさらにはその関わりとして、地藏盆の文化的な事象が京都から若狭への伝承・伝播であったのか、それとも若狭各地域の独自の文化として発展したのかを考察し、以下に述べてみたい。

飾り付けの相違は、地藏盆の開催場所の問題にも、その相違に大きく関係していると考えられる。表1⑦のごとく、京都では駐車場や民家の倉庫、あるいは日常地藏を安置している道路上で行う地区も少数ではない。それに比べて、若狭では特殊な例（小浜西津の小屋）を除き、地区の自治会館や公民館での行事である。

開催場所に関しては、各地域には其々の事情（住宅や物理的）があると考ええる。何故、飾り付けに著しい相違があるのかは、駐車場や倉庫という狭い場所や道路上という条件下では、飾り付けは物理的にコンパクトにならざるをえないからであろう。その制約条件の下で香華や供物を充実させ、飾り付けに上品さを出しているのが京都市の地藏盆飾りと言えよう。

若狭では、小浜市西津には、2地区であるが毎年地藏小屋を立てる。その他の地区には、必ず自治会館か公民館があり、その建屋の中で飾り付けを行う。小浜市に隣接する舞鶴市でも地区別に自治会館がある。飾り付けの特徴は「上巳（じょうし）の節句」（通称：桃の節句・雛祭り）のような、派手な敷布に段飾りのきらびやかな飾り付けで、これは若狭（小浜市・舞鶴市）地域では、ほとんど同様である。



写真24 京都市北区での地藏盆の飾り付け（日常安置されている祠の提灯と幕、祠前に香華と御供物）



写真25 小浜市西津地区の地藏盆の飾り付け

以上飾り付けにおいて、特徴だけに言及した記述になったのは、若狭での段飾りについて、その発生や起源の明確な論拠が見出せなかったのが理由である。

次に、「彩色の習俗」であるが、京都では、古くは顔に「胡粉」を塗り、口に「紅花」の朱を施していたが、最近では、その彩色も見かける例が少なくなったのが実情である。ただ、少なくなった現在の彩色も同じような色調で着色しているが、材料は油性ペンキやマジックインクがほとんどである。

若狭では、石仏の地藏全体に様々な色での着色・彩色を施している。いわば「極彩色」で、後背には「後光」を描いている。古くはベンガラや岩絵具で（群青・緑青・黄土等々）あったが、現在では

エナメルやペンキ・油性ペンなどで自由な色を使って地蔵像に着色・彩色する。これは子どもの仕事であり、この地蔵を「化粧地蔵」と呼んでいる。この彩色習俗も前述の飾り付けと同様に、発生・起源を詳述できる論拠には至らず、各地での実態のみの言及にならざるを得なかった。

その他の特徴には、小浜市の「幡」や「行灯」、舞鶴市では「金色の御厨子と地蔵菩薩立像」（かなり多くの町内会が持っている）が他の地域にはない際立った特徴である。

本研究の主題で「行事内容にみる地域の特徴」については前述の如くである。相関については調査結果から、この地蔵盆は京都から若狭への伝承・伝播があったとは考えられないだろうか。

伝播に関しては、例えば、「地縁的祭祀の様態3——福井県小浜市下根来の事例から——」（林1992）では、

一般に小浜と京都を結ぶ道としては、上中・近江今津をまわる道が鯖街道として知られているが、遠敷川^{おにゅう}を上がるコース、つまり下根来^{ねごり}—上根来—朽木をまわる道を、下根来では本当の鯖街道であるといい、昔はひとの往来が多かったという。……（中略）……したがって宗教者が介在しなかったとしても、京都から直接流入した信仰を受容したことも考えられるのである（林1992：38）。

とし、以上のように、京都からの「信仰の受容」に言及している。

表1の比較表では、信仰観念・主願や主体・行事日の変遷・地蔵像や祠の管理などはほぼ同様であり、それが京都からの伝承・伝播とすれば、その内容を踏襲して今日まで伝承し継承していると言える。

それに比べて、飾り付けや彩色の習俗、小浜の幡や行灯、舞鶴では金色の御厨子と地蔵菩薩立像などの発生・起源については不明であったが、その特徴的な事象は、他の地域にはあまり類をみない独特のものである。

以上のことから、類推的な事柄もあるが、地蔵盆の習俗は、京都からの伝承・伝播であると考えるのは自然であろう。

が、しかし行事での飾り付けや彩色習俗は、その特徴から、若狭での「地域独自の地蔵盆文化」であると言えることが出来ると考える。

VII 地域独自の地蔵盆文化

この研究から得られた各地の地蔵盆行事内容から、地域独自の地蔵盆文化として、「地蔵像の彩色習俗」を例にして考えてみたい。

地蔵の像容にみる各地の特徴として、顕著にあらわれるのは、石仏の地蔵像に彩色をする習俗であった。地蔵の彩色について、各地域で著しい相違があり独特の着色慣習がある。この彩色習俗について在野の研究は別として、発表された有力な先行研究は皆無と言っても過言ではなからう。

以上のことと、この習俗の調査が面白い結果となったことから、各地での「彩色文化」として、他の特徴より少し詳細に考察し述べてみる。

最初に 2010～2012 年の調査（彩色）内容が無作為に考えた項目・地区別に分類し整理してみた。

表 2 地蔵像彩色の地域別分類表

	京都市北区	小浜市西津地区	舞鶴市(西舞鶴)
①彩色の歴史（口承も含む）	江戸末期	明治期	不明
②地蔵の彩色する部分	顔全体に白く塗り口に紅をさす	地蔵像全体に塗り後光も描く	同左
③彩色前の清掃方法	盂蘭盆が終わり地蔵盆の前	同左	同左
④彩色の色調（着色）	白と赤	赤・青・黄・白・黒・金・銀・茶・紫（極彩色）	同左
⑤彩色をする材料等々	油性ペンキやマジックインキ	エナメルやペンキ	同左
⑥彩色をする時期	地蔵盆の前日	同左	同左
⑦彩色者	町内会役員	地域の子ども	町内会役員

地蔵像の彩色に関しては、調査結果を項目別の分類表にしてみたが、一番肝心な彩色の由来・起源や発生時期が不明確であるため、調査から得たデータを羅列したにすぎないであろうが、現在の実態であることは間違いのない事実である。分類表から考えられることとして、若狭の2地区はほぼ同様の「彩色」習俗であると言える。



写真 26 京都市北区の彩色地蔵
（顔に白色の彩色、京都市内はこの様な着色が多い）



写真 27 小浜市西津の「化粧地蔵」
（カラフルな彩色の着色ばかり）



写真 28 舞鶴市（西舞鶴）の彩色地蔵

京都での彩色は、古くは顔に「胡粉」を塗り、口に「紅花」の朱を施していたが、最近では、その彩色も見かける例が少なくなったのが実情である。ただ、少なくなった現在の彩色も同じような色調で着色しているが、材料は油性ペンキやマジックインキがほとんどである。

若狭（小浜市・舞鶴市）での彩色は、地蔵像全体に彩色を施し、尚且つ色調も特定されず自由な色で独特な彩色方法であると言える。彩色する色も、赤・青・黄・白・黒の基本的な色の他に、金・銀・茶・紫・緑というような色もあり、極彩色な色調のような派手な彩色と言える。

彩色に使用するのは、古くは岩絵具（群青・緑青・黄土等々）やペンガラと言うような顔料であったが、現在では京都と同じような、エナメルやペンキ、油性ペンが主流のようである。

彩色は、地蔵像を洗い清めた後で施すのは、京都を中心にした近接地で同様であるが、子どもが彩色する習俗が伝承・継承されているのは、この若狭の小浜市西津地区だけであろう。彩色という大きな枠組みから捉えると、各地域で行われている習俗ではあるが、その彩色の色調や方法、彩色をする主体を考えると、地蔵像の彩色を「化粧地蔵」と称して、現在まで伝承・継承している小浜・舞鶴各市においては、「若狭の化粧地蔵文化」とは言っても過言ではなからう。

この習俗については今後の更なる研究の一環として、起源や由来と言った具体的な論証とともに、広がりのある論考として稿を改めて熟考したい。

おわりに

近代化が進み、地域に於ける文化が著しく変容を重ねる世相の中、京都市北区と小浜市・舞鶴市・を中心にして地蔵盆行事にみる地域の特徴と相関に着目して調査考察を行った。

各地域での調査資料（史料）から、地蔵盆は京都から小浜・舞鶴への伝播であり、その習俗も踏襲され伝承されたものと、一部は内容が変容して地域独自の特徴として今日まで継承されたのであろうという結論を得たと考える。しかしこの事については、今後更なる詳細な調査考察の必要性を感じたのも事実である。

さらに、この研究を手掛けていく中、「地域文化の伝承」と言うことについて深く考えさせられた。それは、例えば、前述の地蔵盆の飾り付けや彩色の習俗である。伝承の論拠となる資料がないため不明な事柄が多いが、これも時代の流れから、若狭地域において京都とは違う独自の文化として発展し伝承、継承してきた習俗ではなかろうか。このような、口伝の伝承文化は、実見した形態から推測・類推するしか方法はなかろうと考えられる。

また、この研究から得られたことを抽象的で飛躍した考え方と思うが、伝承や継承とは、一言でいえば「守る」ということであろう。守るということは、その行為自体が「文化」であり、さらには、それが地域の人々が築きあげ発展させ継承し育んできた、独自の事柄だからではなかろうか。

地蔵盆も、古くは「信仰」の行事であったが、今日では「地域の親睦と交流」が主の年中行事として変容したと言っても過言ではなかろう。しかし、どのような変容になろうが「地域独自の文化」として、先人から後の世まで伝承・継承していきたい事の一つであり、それが地域住民の切に願ってやまない真意であると言うことが出来ると思う。

さらに付け加えるとすれば、それは各地での調査で感じた「地域の方々の生の声」が事実を誇張したりすることのない真実だからであろう。ただし、資料的には十分に検証を重ねることも書き添えておく。

今後の研究課題として、前述の結論が少し曖昧であった「地蔵盆の飾り付け」や「彩色習俗」の調査継続と、地域が育んで継承してきた伝統文化が、その地域に於いて住民の生活のなかでどのような位置付けであったか。地域の民俗誌や民間信仰体系というような広い視点から考えていきたい。

最後に、非文字資料研究センターの奨励研究に採択をして戴きました事に感謝し、以上の研究を「地蔵の民間信仰研究」初歩の契機とさせて戴きます。

謝辞

小稿の調査研究に際して、小浜市での情報や資料を提供して下さい「御食国若狭おばま食文化館」学芸員の一矢典子様、御案内とお話を伺った本村昭吾様、小浜市観光課と西津公民館の皆様、舞鶴市では、御案内とお話をそして貴重な資料やアンケートをまとめて戴いた伊賀原政子様、郷土市史等々の貴重な史料を戴いた加藤晃様、西舞鶴連合町内会、観光商工課の皆様に感謝し、紙面を借りて衷心より厚く御礼申しあげま

す。今後も引き続き調査を予定しておりますので、更なるご指導・ご鞭撻を宜しく御願い申し上げます。

註

- (1) この「出開地藏・貸地藏」について、松崎憲三は『巡りのフォークロア——遊行仏の研究——』の中で、次のように述べている。

京都市中京区壬生寺の貸地藏は昭和四十年以降とりわけ盛んになったものである。貸し出し範囲は旧京都市周辺のみならず、亀岡市、大津市、そして向日市、長岡京市を経て枚方から大阪市に至る広範な地域に及び、団地内広場あるいは自治会々所などで地藏盆に祀られるというのが通例である。」(松崎 1985: 32-36)。

さらに、壬生寺から附与・貸地藏の経緯及び経年データについて

京都市を中心に、関西諸都市の旧市街地においては、毎年盛大に地藏盆が執行されており、一方それに対応して新開地においても地藏尊を団地内・公園などに安置し、交通安全の祈願もしくは子供の守り本尊としてやはり地藏盆を中心に祀るというケースが目立つ。

……(中略)……こうした情勢と市民の欲求に答えて、地藏尊を附与するばかりではなく、……(中略)……地藏尊の貸し出しを精力的に行っている数少ない寺院の一つである(松崎 1985: 32-36)。

以上のように「出開地藏・貸地藏」について言及している。

松崎は「子どものためにあるいは町内・団地のレクリエーションとして」必要な存在と述べている。1975年前後から始まった少子高齢化は、その後2005年をピークに低下の一途を辿っている。この論考(1985)の年代は、まだまだ子どもが多いとは言えないが、現在ほど少なくはなかったと言える。さらには、1986年から約5年間の「バブル景気」の影響から、マンションや団地が乱立した年代でもある。以上のような時代背景からも、松崎の『巡りのフォークロア——遊行仏の研究——』は「地藏盆」習俗の現在を視野にいたれた重要な論考と考えられる。

- (2) 「塞」とは、ふさぐ、ふさがる、とりでの意。通路をふさいで守りを固めた所。国境地帯(大辞林 1988)。

「賽」とは、神仏に礼まいりする。そのためにささげる金品(国語大辞典 1995)。

- (3) 「洛下童子地藏祭」に「洛下兒童各供香華於街衢之石地藏而祭之蓋道饗祭之遺風乎」。「洛下のじどうおのおのこうげをそなえがいぐのいしじぞうにおいてこれをまつるがいしみちあえまつりのいふうか……(後略)……」とある『新修京都叢書』(巻七)「日次記事七月」(新修京都叢書刊行会 1994: 312)

- (4) 例えば、本稿p19の『年中行事と民俗芸能 但馬民俗誌』(大森 1998)以外で、九州熊本の場合として「地藏祭りの変容と再生——熊本城下と新興住宅街の場合——」『風俗第22巻第4号』(牛島 1983)には

……(前略)……ところで、農村では盆行事とともに一年を二分する正月の火祭りにおいて、大人たちに対する子供組の金品の強要の例がみられる。……(中略)……地藏祭りも年長順にまとまった子供組が地藏尊を囲んで鉦をたたき、大人たちに賽銭を強要する等の点での村の例を基盤としたものといえよう。」これは「その場合子供たちは組にまとまることによって個々人の家や大人たちの保護を離れ、ムラの中で独自の主体性をもつものとなる」(牛島 1983: 62)。

とその習俗について述べている。

このような貴重な報告事項を基に、今後習俗分布調査の必要性があると考えます。

引用参考文献

- 石川純一郎 1995 『地藏の世界』 時事通信社
板屋一助 1981 「稚狭考」『拾推雑話・稚狭考』 福井県郷土誌懇談会
伊藤唯真 1986 「地藏盆と念仏講」『仏教民俗学大系』6 仏教年中行事 名著出版
伊藤曙覧 1959 「地藏の名称」『仏教と民俗』 大正大学
井上頼寿 1933 『京都民俗志』 西濃印刷岐阜支店

- 井上頼寿 1968 『京都民俗志』 平凡社
- 牛島史彦 1983 「地藏祭りの変容と再生 熊本城下と新興住宅街の場合」『風俗』第22巻第4号通巻77号
日本風俗史学会
- 宇野田綾子 2002 「マンションにおける地藏盆行事の生成」『近畿民俗』第164・165号 近畿民俗学会
- 宇野田綾子 2003 「福井県小浜市尾崎の地藏盆」『西郊民俗』第182号 西郊民俗談話会
- 大島建彦（編）1992 『民間の地藏信仰』 溪水社
- 大森恵子 1998 『年中行事と民俗芸能 但馬民俗誌』 岩田書院
- 大森恵子 1999 地藏盆『日本民俗学大辞典』上 吉川弘文館
- 小川直之 2010 地藏盆『NHK 俳句』9月号 NHK 出版
- 木崎陽窓 1981 「拾推雑話」『拾推雑話・稚狹考』 福井県郷土誌懇談会
- 京都市（編）1980 『史料京都の歴史』第7巻 平凡社
- 京都市（編）1980 『史料京都の歴史』第9巻 平凡社
- 京都市（編）1980 『史料京都の歴史』第12巻 平凡社
- 黒板勝美（編）1999 『本朝世紀』新訂増補 吉川弘文館
- 黒川道祐（撰）1999 『日次紀事』新修京都叢書第4巻 新修京都叢書刊行会
- 五来重・桜井徳太郎・大島建彦・宮田登（編）1980 『講座日本の民俗宗教』2 弘文堂
- 五来重 1976 『仏教と民俗』仏教民俗学入門 角川選書74 角川書店
- 五来重 1979 『続仏教と民俗』角川選書99 角川書店
- 五来重 1982 『宗教歳時記』角川選書134 角川書店
- 五来重 1995 『庶民信仰の諸相』宗教民俗集成4 角川書店
- 斉藤利彦 2007 『京都の庶民信仰とお地藏さん』 世界人権問題研究センター
- 坂本要 2000 「民間信仰」『日本民俗学大辞典』 吉川弘文館
- 桜井徳太郎 1962 『講集団成立過程の研究』 吉川弘文館
- 桜井徳太郎 1970 『日本民間信仰論』増訂版 弘文堂
- 桜井徳太郎 1988 『民間信仰の研究』上 吉川弘文館
- 塩崎雪生（編）2009 『新国訳大蔵経 諸経部2 地藏十輪経』 大蔵出版
- 清水邦彦 2011 「京都地藏盆の宗教史的研究——祖霊観解明の一手がかりとして——」『比較民俗研究』第25号 比較民俗研究会（神奈川大学大学院 佐野研究室）
- 清水邦彦 2012 「兵庫県豊岡市竹野町の地藏盆」『比較民俗研究』第27号 比較民俗研究会（神奈川大学大学院 佐野研究室）
- 清水夏樹 1980 「地藏まつりと地域社会」『ソシオロジ』79号 社会学研究会
- 高橋渉 1981 「京都の六地藏参り」宮城学院女子大学研究論文集55号 宮城学院女子大学紀要編集委員会
- 高橋渉 1982 「京都の地藏信仰」宮城学院女子大学研究論文集57号 宮城学院女子大学紀要編集委員会
- 竹村一夫 1991 「都市における地藏信仰とコミュニティ形成」『ソシオロジ』110号 社会学研究会
- 田中久夫 1973 「京都府」『近畿の民間信仰』 明玄書房
- 田中久夫 1985 『年中行事と民間信仰』 弘文堂
- 田中久夫 1995 『地藏信仰と民俗』新装版 岩田書院
- 田野登 1988 『大阪市西区の地藏信仰調査書』 近畿民俗学会
- 田野登 1994 『大阪のお地藏さん』 溪水社
- 中村元（編著）1989 『仏教行事散策』 東京書籍
- 服部比呂美 2005 「子ども集団と民俗社会」『伝承文化研究』第4号 国学院大学伝承文化学会
- 服部比呂美 2010 『子ども集団と民俗社会』 岩田書院
- 林英一 1992 「地縁的祭祀の様態3」福井県小浜市下根来の事例から『近畿民俗』134 近畿民俗学会
- 林英一 1997 『地藏盆』受容と展開の様式 初芝文庫

- 林英一 2008 「明治政府の近代化政策と地藏盆」 地藏盆の成立をめぐって『日本民俗学』255 日本民俗学会
- 速水侑 1981 『地藏信仰』 塙書房
- 堀一郎 1951 『民間信仰』 岩波書店
- 伏見のまちづくりをかんがえる研究会 1987 『子育ての町・伏見——酒蔵と地藏盆——』 都市文化社
- 舞鶴市史編さん委員会（編）1975 『舞鶴市史 各説編』 舞鶴市役所
- 舞鶴市役所（編）『ふるさと舞タウン』vol.9 2003 舞鶴市企画政策室
- 牧田茂 1973 「地藏を塗る習俗」『化粧地藏 こどもの神さま』 淡交社
- 松崎憲三 1985 『巡りのフォークロア 遊行仏の研究』 名著出版
- 宮家準 1980 『生活のなかの宗教』 NHK 出版
- 宮家準 1990 『民俗宗教へのいざない』 慶應通信
- 宮家準 1994 『日本の民俗宗教』 講談社学術文庫 講談社
- 宮家準 2002 『民俗宗教と日本社会』 東京大学出版会
- 宮田登・塚本学（編）1994 『民間信仰と民衆宗教』 日本歴史民俗論集 10 吉川弘文館
- 宮津市史編さん委員会（編）1994 『宮津市史史料編』第五巻 宮津市役所
- 宮本袈裟雄 2003 『庶民信仰と現世利益』 東京堂出版
- 民俗学研究所（編）1951 『民俗学辞典』 東京堂出版
- 望月信成 1989 『地藏菩薩——その源と信仰をさぐる——』 学生社
- 八木隆明 1981 「京都の地藏盆第21回社会教育研究全国集会に向けて」『月刊社会教育』225 国土社
- 八木透 2002 『京都の夏祭りと民間信仰』 昭和堂
- 八木透（編）2006 『京都愛宕山と火伏せの祈り』 昭和堂
- 山折哲雄・川村邦光（編）1999 『民俗宗教を学ぶ人のために』 世界思想社
- 山崎千恵子 2000 「地藏盆あれこれ」『子どもの文化』 財団法人文民教育協会
- 山路興造 2009 『京都 芸能と民俗の文化史』 思文閣出版

参照ホームページ（URL）

- 京都市北区役所ホームページ <http://www.city.kyoto.lg.jp/kita/> 2010年8月20日
- 小浜市役所ホームページ <http://www1.city.obama.fukui.jp/> 2011年8月22日
- 舞鶴市役所ホームページ <http://www.city.maizuru.kyoto.jp/> 2011年8月18日
- 宮津市役所ホームページ <http://www.city.miyazu.kyoto.jp/> 2012年8月20日